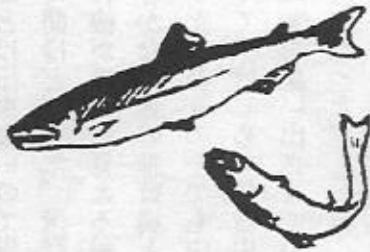

一部50円です

アユ釣り名人



陽炎が線路から立ちのぼる夏の昼下がり、父とふたりで由良川へアユ釣りに度々行った。芦生の原生林を源流とする由良川は、美山から和知の山あいを蛇行し、綾部・福知山を経て、「山椒大夫」の舞台になった宮津・由良の海岸にたどりつく。

北大路魯山人が好んで食したという和知のアユ。その釣り名人が私の村に住んでいた。通称さだやんである。彼の家は村の中ほどにあり、かやぶきの家に奥さんと私より少し年上のひとり娘の三人暮らしであった。家の田畑は少なく親類縁者も少なかったためか、質素に暮らし、性格はひかえめで穏やかであったと母は言う。さだやんは、アユ釣りの季節になると毎日由良川へ通った。アユ釣りにはオトリのアユがいるので、家の軒先に設えられたイケスにはいつも活きのいいアユが泳いでいた。

村の古老は「このあたりでアユ釣りの上手かったのはさだやんや。うなぎがオトリのアユを食べようとして針に引かかった時などは、その大きなうなぎを竹竿で軽々と釣り上げて『持ってかえれ』とくれたことがあった。アユが入った缶を自転車の荷台に積んで、砂利道をチャポンチャポンと音をたてて走るのを不思議に思って訳を聞くと、アユは缶の水が波打つ時に酸素が水中に入るから生きておれるのやと教えてくれたこともあった」と懐かしそうに言う。

私は、子ども心に漁師に対するあこがれの気持ちが強かったが、今思えば夏のアユ漁だけで生計を立てるのは大変だったと思う。さだやんはウエットスーツなどない時代、川の水で身体を冷やし過ぎたためか若くして亡くなり、嫁さんもまもなくして亡くなった。ひとり残された中学生の娘は遠くの親戚へ引き取られていった。

それから村には、アユ釣りを生業にする人はいなくなった。山奥の貧しい村で田畑が少なく、生きるために漁師という仕事を選んださだやんは、生きていくためにアユ釣りの名人にならなければならなかったにちがいない。

父は、一時期アユ釣りを教えてもらうために、さだやんに弟子入りしたが、上達しなかった。私とアユ釣りに出かけたときも、なかなか釣れず、死にそうになったオトリだけが泳いでいる缶を担いで、川から父と線路沿いに帰ったものだ。

娘が通っていた学校の先生が定年を前にして退職し、田舎で農業をされている。「自分は教職にはむいていなかった。百姓をして暮らしたい」というコメントが学校の同窓会通信に載っていたのを見た家内が「サッカーの岡田監督もワールド・サッカーが終れば田舎で晴耕雨読の生活をしたいたいとおっしゃっているようだし、爺捨て山のトレンドが中年の男達に広がっているみたいね」と言う。

商売していても勤め人であっても、どうもこの世の中、生きにくくなってしまったようだ。いくらもがいて働いても、思うようにはいかない。下りエスカレーターを昇っているみたいなのに、いっこうに上が見えないどころか、前よりも下がってきている気がする。

金儲けをするためには、多少の悪事を法に触れぬように要領よくしなければならぬ。それが嫌なら清貧に甘んじるしかない。人の能力の差など人が思うほどはない。透明・クリーンで誠実な仕事をして儲かる話など、この世の中にはない。

爺捨て山こそは、我執を捨て去り無垢の自分をさらけ出し、この世に生まれきた凄さを実感できる空間であると思う。

死ぬために生きている人は、死ぬ過程にこそ人生の秘密があると思うのだが…。

《ヒマラヤへの道 9》

ガルムツシユ峰

梵店主

1977年7月の初め、遠征隊の装備一式を航空便で送った。荷は削れるだけ削り、200キロまでに抑えることが出来た。パキスタンでの荷物の受け取り点検等に手間取る心配があったので、山猿と由べえの学生二人に先発隊として本隊より一週間早く出発してもらった。

一週間後、よっちゃんと隊長の村松の二人は旅行団と一緒に羽田発、北京經由、パキスタン・ラワルピンディ行きに乗った。飛行機に初めて乗ったよっちゃんは、出発出来た嬉しさに没る間もなく旅行団との打ち合わせに追われたのであった。羽田を飛び立ったパキスタン航空の飛行機から富士山が良く見え、よっちゃんは感激した。まもなく機内食が出て暫らくしたら何も無い北京空港に着陸した。すぐに中国兵士が乗り込んできてパスポートのチェックを行なう。無事検閲が終るとタラップを降りてバスに乗って待合所に行く。

昔の北京空港は本当に何もない飛行場であった。待合所も小さな建物で売店があつて冷えていないビールを二十円ぐらい払って飲んだ。「安いなあ」と思った。トランジットなので空港外へ出る

ことは出来ないもので周りを見ながら二時間ほど待った。飛行場には数機の飛行機が遠くに見える程度できわめてのどかな田舎の飛行場といった感じであった。我々の中でも中国に來た人はなく、はじめて見る中国の風景に日本の昔を思い出させてのんびりした気持ちになつた。

北京を離陸した機はタクラマカン砂漠の上を飛び続けてヒマラヤ山脈を横断する。夕闇の中に雪をかぶつたヒマラヤの峰々が眼下に見えた。いよいよヒマラヤの領域に來たのだという実感がわいてきた。

深夜のラワルピンディの空港に着きタラップに出たとたん、なんとも言いようのない臭いと熱風が襲つてきた。暑いとこへ來たんだという思いと、これから始まるんだという緊張感で気が引き締まつた。

空港から先発隊が泊まつているホテルに向かった。旅行団のみんなは別的高级ホテルで我々は安宿であつた。当夜は疲れていて直ぐに寝た。

翌日、早速イスラマバードにある政府機関に行き手続きをするが、のんびりした対応なので早くしてくれるように交渉する。パキスタンの軍人である士官と会い今後行動を共にするわけだから協力をお願いした。先に送つていた荷物を受け取りホテルに持ち帰り

現地調達する予定の食料などを買った。今回予想した問題の一つは、イスラマバードから登山の基点になるギルギットへの飛行機であつた。この航路の便数は少なく小型機である為

に天候に左右されやすく、1週間位は足止めを食らつたという話を聞いていたから心配であつた。予想した通り我々も、2日間2回も足止めをくらつた。朝早くホテルを出て飛行場まで行き受付の人に今日の運行状況を聞くと、「インシユラ

、(アラーの神のみ知る)」と言ふ。空は晴れているので大丈夫と思うのだがギルギットの天気が悪いらしい。ギルギットの空港は標高の高い山間に作られた小さな飛行場でこれまで幾度も離発着の事故が起きてい

るらしい。イスラマバードの天気がよくて飛び立ってもギルギット上空の天気が悪くて引き返すことも度々だと言ふ。こんな天気任せであつても、毎日早く行って順番を取らないとせつなく飛行機が飛んでも乗れないことになつたら大変だから毎日神に祈つて出かけた。飛行場といつても小さな事務所があるだけで職員も少なく毎回行けば顔なじみになる。

3回目、朝一番機が飛んでくると

いうので期待して待つ。天気が悪い良いとコロコロ予想が変わるが、とにかく飛ぶらしいと職員から情報が入つた。

さあ、出発だ。荷物を飛行機に詰め込み小型機に乗り込んだ。この機はだいぶ古そうで座席の下に穴があいていて下が見えた。座席も少なく20席あまりである。席にはピニールの袋がそなえてあつた。最初何かと思つたが飛び立って直ぐに気づいた。気分が悪くなつた時に使用するためだつたのだ。

ギルギットまでは一時間ほどなのだが、小型機で気流の激しい上空を飛ぶため機体の揺れが激しい。ジェットコースターに乗つていのように揺れた。パキスタン空軍が使用していた中古の機体はいつ落ちてでも不思議でないように思えた。

しかし、パイロットは空軍のベテランらしく落ち着いていた。怖い飛行が続いてギルギットの上空に來て飛行場を見たら山の斜面に傾いた小さな滑走路が見えた。あそこに降りるのかと思うとますます不安になつた。滑走路の周りには事故を起こした機体の残骸が幾つも見えた。

よっちゃんは、不安一杯であつたがどうすることも出来ない。機はガタガタと揺れる音を立てながら山の間に斜めに傾いた滑走路の下の方へ突っ込んでいった。傾斜を利用している為か短い距離で着陸し、無事機が止まつたときには乗客からホッとしたようなため息がもれた。「ああ、無事着いた」。よっちゃんは、ひとまず安心した。

賛店主

山岳部のOBには色々なタイプがある。山岳部の持つ人間関係などが好きな人、純粹に山が好きの人。山岳会の活動で熱心なのは前者の方であって、後者のタイプは意外とマイペースで協調性に欠ける点があげられる。また、発想がどうしてもしろい人や研究熱心なタイプ、活動の維持管理が好きで人間など様々だが、田中先輩の人間性は常におもしろい事を考えている大人になりきれない少年のよ

うな印象であった。そのネタ探しは常に本であり未開の現地人との会話によつてなされていた。

田中さんの展開はきわめて素朴な質問から始まる

「男が元気になる食べ物やクスリは何か」

という問いかけをタイ山奥で出会う現地の男達にする。すると、言葉は通じずとも男同士の直感で、

「ああ、そのことか」

と相手も理解するのである。古今東西、男の願いは変わらない。常に強く元気で女を喜ばせたいと思っている。どんな奥地に行っても田中さんの問いかけは友好的で生きている事の核心部を突いていたのである。

そんな田中さんの問いに現地の男達は熱心に元気になるという種や根など漢方薬になると思われる数々の草木を採ってきて田中さんに提供した。それを試食したりしながら袋詰めにして日本に持ちかえって書齋にコレクションしていたのである。

田中さんが異常とも思えるように元氣の出る秘薬にこだわった理由のひとつにある出来事があった。田中さんは学校を出てすぐにマグロ船に乗り込み1年間漁師になった。その時、女氣がなくてサメと交尾を試みた結果、男根が非常にはれ上がった。そんな失敗を繰り返した。

男の人生そのものを男根に求めるようになったきっかけは、山岳部のボルネオ島遠征ではないかと私は考えている。未開の地域をゴムボートで探検する学術調査なのだが、原住民の生活を見聞きする中でより興味を持ったに違いない。

田中さんが50歳前だった頃、若いころに感染したマラリヤが発症し、40度以上の熱が出て西宮の病院に入院していたことがあった。高熱が一週間も続き死にそうになっても、日本の医者にはマラリヤに慣れていないためにキニーネという薬をなかなか投与してくれないと嘆いていた。結局一月ほどで退院できたが、タイの奥地に行けば、

日本にはない病気になる。そんな危険性も無視して田中さんはタイの奥地へ行き続けた。

田中さんは妙な趣味があった。集めるという癖である。ガラクタと思われる物でも大事にしまっておくのである。古本などは将来、価値がでるかもしれないとか、読んでみたいとか言いながら、たくさん古本を古本屋のように書齋に積んでいた。タイの民芸品も沢山集めた。竹製品や布など行きたびに集めてきたのである。

私が西武百貨店「つかしん」で手作り品の店を開いて間もない時に、田中さんは「このタイの布を売ってくれや」と多くの布を持ち込んできたことがあった。現地の女の人達が手機で織ったもの。粗い糸の寄りと原始的な染めがされた布は、日本の洗濯には耐えられそうに無かった。民族衣装や民具などは問題なく関心ある人に売ったが、布は苦情が出る。ことが確実だったから少ししか売らなかつた。

田中さんは私に現地に来て染色や織りの指導をするように言ったが、そんな余裕は私には無かったので断わり続けた。田中さんは、執念深く、タイの山奥の人々の現金収入を何とか確保したいと手機の布を商品化できるように懸命に努力した。

その結果、日本の手織り教室を手がけ

る商社と掛け合い、現地での生産・加工を日本からの技術支援を図りながら軌道に乗せた。十年以上の歳月を費やしてである。

何もないタイの山奥にどうして田中さんは通い続けたのか。パンコクにタイの友人と共同経営の中古の船舶部品会社を経営しながら、一年の大半を未開地域で過した。私は、田中さんはタイの田舎に失われた日本の昔の風景や人情を探していたのではないかと思う。

田中さんが、幾度も怒って言っていた。

「ぼくは、少し会社で偉くなったからといって、人を見下げたように奴がいちばん嫌いだ。会社辞めたら只のおっさんじゃないか」

「人の道を外してはいかん。くだらん本しか読んでない奴はバカや。本を読まなアカン。僕が若い時に古紙回収の仕事をしていて情けのうなつたのは、立派そうな家々から古紙回収に出される本がどうしようもない低俗な雑誌ばかりで家に住む住人の程度が分かつたわ」

「稼ぎの多寡じゃない。文化程度が問題だ。本を読め、図書館や古本屋へ行け」

先輩は、いつも古本屋を探しては喜んで

死から生への問い 人生とは何か

祖蔵 哲

一、死の定義の変遷(つづき)

当人が苦しみから開放され、もし意識があればもう治療はいよいよと言うことも想像しました。しかし、いろいろと考えた挙句、結論は普段考えていたようにはなりません。やはりすこしでも長く生きてほしいということにしたのです

一般に治療には積極的と消極的があります。積極的治療とは人工呼吸器などで本人の意識ありなしとは関係なく物理的に生かすことです。消極的治療とは痛みや苦しみを取り除くだけの行為。最低限の処置ともいえます。医学が発達した現在、この積極的と消極的の基準がどんどん変わっています。昔は積極的治療といわれていたものが今では普通の医療行為になっていきます。現代に生きていく限りなにが良いとか悪い、自然に反しているということとは言えないのです。冒頭に言いましたがそもそも現在、普通の状態の死からは自然死というものがなくなっているのですから。今でも宗教によっては輸血を拒否する団体がありますが、その人として風邪をひけば医者にかかるでしょう。

病院での治療を続けるという結論を出してからも私はできるだけ毎日病院に行きました。病院は、母が嵯峨野のグループホームへ入っていた関係から阪急の桂駅に近い所にありました。私の勤めは大阪ですから帰りは早くても7時30分頃。朝、自転車をJR花園駅へ預けておき、夜片道40分程かけて天神川通りから、国道9号線、桂大橋を渡り物集女街道の病院へ通いました。不思議なものです。自転車では往復2時間弱かかるものをなんの疲れもなく続けられました。

今思えば8月10日、母がホームからこの病院に運ばれた日差しが強い夏の日から、亡くなる12月始めの寒い冬の初めまで。雨の日や風の日も、桂大橋から川の流れ山の眺めで季節を感じながら自転車に乗っていました。車でもいいのと思うかもしれませんが、この方法がなぜか母を感じていられる時間だったのです。

そのようにして病院に行っても母の意識はうつろで、私の声を聞いているのか顔をみているのかどうかもわかりません。それでも心は安らぎ話を通じたのです。あれは一体、誰と話していたのでしょうか。確かに意識も反応もなく、心で会話をしたんですけど、そういう瞬間を表現になりそうですが、そういう瞬間を持てたということは、私

にとつて本当に幸せな事でした。

そして最期は家族全員の前で文字通り息を引き取りました。しかし私の場合は大変めぐまれた有難いケースだと思えます。親が遠く離れたところにいる場合や病気が急変したり、不慮の事故等々なかなかゆつくりと二人称の死に寄り添うということはできないものです。

こういう有難い機会が与えられたことと併せて、もうひとつのことを考えるきっかけになったことがあります。時期をたがえず私の隣の家のお孫さんがまだ20歳そこそこの若さで交通事故に遭われて亡くなったのです。両親にとつてその娘さんは一人っ子でした。なかなか子宝に恵まれず、やつと生まれた子供らしいのです。この二人称の死はもつとも受け入れがたい不条理なものです。私の母の死は言わば幸せな死。このように同じ人の死でも様々な死があるのです。ここで私は「死の意味」ということを考えざるを得なくなつたのです。

二、死ぬこととは

つぎに「死の意味」について語ろうと思えます。前項でも書いたように死の在り様は三種ある。最終的には、一人称である私の死ということになるのだがこれは語れない。自分の死は体験

出来ないからだ。誰も死んで後生き返つた人はいない。時々私は生き返つた、死後の世界を見てきたという人が現れるがどうも胡散臭い。けれども自分が死んだらどうなるだろうということは考えられる。これは、二人称、三人称の死と同じことで、死んだら人はどうなるのかということになる。

世の中に絶対こうなると断言出来るものはない。しかし人間に限らず生物における死とは、確実なものである。存在するものはやがて失われるというのは唯一の真実であるかもしれない。我々の地球や宇宙の万物は生まれて消滅してきた歴史のくり返しである。やがてこの宇宙も無くなるということはどうも確実らしい。

この歴史のなかで永遠の生命を獲得たものはない。人間はその永遠なるものを「神」といった名を付け総称している。しかし誰もその存在は確かめられない。この世に生あるものはいずれ消滅するのである。

しかし自分が死ぬ存在であるとは知っているのは一人間だけである。確かに動物でも死期に近づくと仲間から離れたら死の準備とみられそうな行動をとるものもある。しかしそれらは本能であり、健全な状態からそんな行動をとるものはない。人間だけが万物の長であり特別な存在であるという高慢、

くはないが、確かにそうである。人間は自分自身が死ぬべき存在であるということを知っているからこそ文明を作り出した。限られた時間しか存在しないのを知っているからこそ、その形を残そうとするのかもしれない。

しかし普段私たちは死を意識しないで生きている。むしろそれを考えることを避けて享楽におぼれているといつてもよい状態かもしれない。そうでなければ、いつも死の事を考え行動しようとする精神疾患者である。このように極端に死がある現在でも、二人称の死、つまり身近なひとが亡くなると、やはり死というものを考える。こういったように人に考える機会を与えているのも一つの「死の意味」かもしれない。

人は死んだらどうなるのか。自分が死んでも今この残された世界はありつづけるのだろうか、また自分はどこへ行くのだろうかと考える時がありま

こんな境遇に生まれてきたのか」「なぜこんなに苦勞をしなければならぬのか」等々の問いはたくさんあります。これはすべて自分の存在の根拠を知りたいと思うことなのです。アイデンティティつまり自己同一性、自分は何者なのかという根源的な問いです。これはこの問題の発生に自分の意思が関与できないからこそ悩むのです。人間という動物は「知る」ということなしに存在出来ないものです。一体、自分はどこから来て、どこへ行くのか。何のために生まれてきたのか。

サラリーマンエッセイ 28

「参議院選を控えて」

明石 幸次郎

「国民が自分の言うことに聞く耳を持たなくなつた。自分のやつたことは、10年、20年後に分かつてもらえる??」などと、預言者のような迷言?をはいて 鳩山さんが、大幹事長を道すれに辞任してしまいました。基地問題で期待したり、失望したり、怒ったりして振り回された沖繩の人達に対する首相としての責任は「迷惑をお掛けした」だけでは、収まりがつかれません。10年、20年後には基地は返還されるのでしょうか。この迷言に対して「宇宙人になつてしまった

首相の言う事が分かる様な耳をもって居るのは、アンタの奥さんと、一日50万円の子供手当てをくれるお母さんだけやろ」と返したくなります。しかしながら、道すれ辞任して、最後には大きな決断をして、苦戦を予想されていた選挙の流れを変えたと民主党員に対しては、評価を上げたのでしょうか。

任した、権謀術数に長けた小沢さんで、幹事を辞任したので、今は静かにして欲しいと、菅首相に言われているが、その通り静かにしているはずはなく、民主党が過半数を割れた場合は、取り巻きもこの人をほっておかないでしょう。

この宇宙人の後を次いだのは、超リアリストと言われる菅さんです。以前、女性問題が発覚した時に「バカ! 脇が甘いよ」と奥さんに一喝されたこの人は、この奥さんに「私が納得しなかつたら国民も納得しない」と日頃から鍛えられておられ、また年金未納問題で党首を辞任したあと、四国お遍路で修業をしたりして(年金未納は誤りだと後で判明)、家庭内外?で挫折を味わい苦勞されているだけに、日頃の言動にも気を遣い、したたかな政治家だと言われています。権謀術数の政界で上に上がって行くには、この「したたかさ」がないと勤まりません。

その結果、菅内閣の政権が不安定になり、政界再編などと動き出せば、去年の総選挙で民主党に期待して政権の交代を果たし、マニフェストで掲げた政策の実現を期待して見続けている我々の想いとは違った政治状況になりかねません。政治的不安定状況が続けば、この国はどうなるのでしょうか? 今、我々国民が政治に求めているのは、自民党の政治手法であった族議員と官僚による旧来の特定利益団体への利益誘導中心型政治を変えて、デモクラシーによる既存の縦割り行政にメスを入れ、財源の配分を変えて、景気回復、財政再建、税金の無駄使いの排除などを実現させる政治を民主党に期待した訳でありました。

鳩山政権で国民は沖繩基地問題、財政赤字と官僚と政治家の力関係などの勉強もしましたし、それに対する授業料は払いました。願がわくば、菅内閣は今までにない安定した政権となり、今まで払い続けた授業料と国民の期待にリアリストとして応えて欲しいものです。そのためにも、今回の参議院選は政治的な安定を求める視点で、投票したいものです。

義兄とその家族 (7)

義兄はガンの最先端医療と呼ばれるうちの2つ、免疫細胞療法とカテーテル療法にトライしたが、中途半端な結果に終わった。前者は培養がうまくいかず、後者は血管がもろくなっている入らなかった。

ただ、カテーテル療法の先生が「高濃度ビタミンC療法」というものも手がけていて、そちらに切り替えましょう、ということ、いま現在、義兄はそれを受けている。ガンを治す決め手になるのかどうかはわからないが、少なくとも、義兄の体の負担にはなっていないようで、週に2回、その先端医療のクリニックに通っている。

もし、これに通っていなかったら、義兄は医療機関から見放された、いわゆる「ガン難民」といわれる一人になっていた。今年初めに森ノ宮の成人病センターを退院し、通院での抗ガン剤治療が終わると、義兄は「たまの検診と具合が悪くなったら行く」ことが許されているだけの「一般人」になった。成人病センターに頼ってきた義兄は、「抗ガン剤は活動しているガン細胞には効くけど、休眠しているガンには使えないんだって」と少し、寂しそうに言った。義兄は徹底的にガン細胞を叩いて、「治った」という確証を得た

かったようだ。姉と私は抗ガン剤で髪の毛も抜けミイラのように痩せ細っている状態で、まだ抗ガン剤治療をしてもらいたいのだろうかと思議だった。

ともかく、病院に「これで、ひとまの治療が終わりました」と言われて、義兄は治った、治療から開放されたとは思わなかったようだ。義兄と医者の間で、どんな話が交わされたのか、直接聞いてはいないのだが、どうやら「多分、再発すると思っていた方がいいでしょう」「それは脳の可能性が高い」「そのときは、覚悟して下さい」みたいな宣告だったようだ。

「病院から、がっくりして帰って来てやってん」と姉はひそひそと私に言った。森ノ宮の成人病センターには日々、重症のガン患者がやって来るのだから、一人の患者の精神的ケアまで望んではいけないし、正直に患者の置かれている現状を伝えることも大切だ、とは思っている。だが、その同じ時間で「よく頑張りましたね。アナタの生命力はなかなかのものですよ。再発の可能性がないといったらウソになるが、しっかり体調を整えて、そういうことにならないように頑張ってください。もし、何か不調を感じたら、飛んで来て下さい」と言ってくれたって、バチは当たらないと思う。明るいことを言って、後で

ガツカリして訴えられたら困るんだろうけど、少しは患者の身にもなってみる！と言いたい。再発。それは、ガンを患った者にはあまりにも重いマイナスの暗示だ。アメリカ的なポジティブ・シンキングがいいとばかりは限らないだろうが、日本にも「病は気から」という言葉がある。医者にも思いやりの心つてものが必要ではないのか。「先生、その言葉、自分の大事な家族にも言うんですか？」と私は聞いてみたい。姉は「テレビドラマみたいなこと、期待したらアカンで。なにしろ患者の数が多いいねんから。早く、そのベッドを開ける、次の人が待ってるねんって言うことやねん」と言う。

そして、達観しつつある？姉は「ま、そういう対応しか受けられへん生き方を、〇〇(義兄の名前)も私もしてきた、いうこっちゃね」とつけ加えた。それで思い出すのが、今年の2月に大腸ガンの手術を受けた、わが親友のお姉さんだ。年齢が近いので、親友のお姉さんも私の友達だ。地元の医院で、中津の済生会病院を紹介され、そこで手術を受けたのだが、親友の姉、クミコさんは一貫して明るく、落ち着いていた。理由は「先生が、ああ、こんな大丈夫ですよ、チョンチョンチョンと手術して、悪いとこ取って、パツパツと治しましょ、と言うてくれては

るから」だ。実際は、そのガンはかなり大きくなっていて、手術も大変だったみたいだが、手術前夜、回診に来たその先生は「クミコちゃん、どお？」と子供が子供に呼びかけるみたいに言いながら病室に入ってきたと、お姉ちゃんも私も吹き出して「お姉ちゃんも私も私も吹き出してん(笑)」と友達が言っていた。手術前の緊張が一気に和らいだことだろう。

そして、手術後、その先生は「うん、よく頑張った！ えなかったな。それによく見たら、クミコちゃん、美人やつてんな」とまで言ってくれたそうだ。私の友達であるから、そういう声がけをしてもらえる年齢は、はるか昔に過ぎ去っているが、別にいいと思う。患者は絶体絶命、不安の塊だ。冗談でも何でも言って親近感を抱かせてくれ、「この人に任せよう」と思えたら、それだけでどんなに救われることか。いま、クミコさんは軽い抗ガン剤を飲みながら、パートの仕事に復帰している。再発のリスクを抱えているにしても、心は平安のようで、義兄とは大違いだ。医者の言葉の使い方一つで、とまで言ったら医者に悪いかもしれないけど。



「女好き」

老人ホームでは百歳の爺さん時々、揉め事を起こしていた。車椅子で老女の部屋に侵入するためだ。介護スタッフに見つけられては「ここへ入っては駄目ですよ」と叱られ、追い出された。しかし、また繰り返し返した。痴呆になっていたもので、何を言っても理解できない。ただ「ウー、ウー」と言うだけだった。不思議なのは、侵入された老女の方から、取り立てて文句が出てこないことだった。介護スタッフが気づくまでは騒ぎにならなかった。老女もまた互いにスキンシップを楽しんでいたのではないか、と思う。

まさか事に及ぶことはなかっただろう。いや、及びたくても及ばなかったに違いない。何せ百歳である。それでも女好きだった。

その後、爺さんは一年ほどで亡くなった。ひよっとすると痴呆を装っていたのかも知れない。(龍)

(介護の話はこれで終わります。次からは、気の向くままに随想を書きます)



高槻からの眺望 5

敷島旭

戦国時代、高山右近という武将がいた。クリシタン大名として有名であり、また千利休の高弟としても名を残している。時代は、織田信長、豊臣秀吉がいよいよ覇権を確立しようとしている頃であった。右近は、人徳の人として語られることが多いようである。しかし、実際のところは父友照と共に、下克上に身を投じ、自ら仕えた和田惟政の後継者、惟長を攻め、高槻城を乗っ取るなど、戦乱の時代をうまく立ち回り生き抜いてきた。ただ、高槻城を乗っ取る際に惟長と斬り合いに及び瀕死の重傷を負う。右近は生死の境を彷徨したが、奇跡とも言える回復を遂げた。この時に、思うところがあつたのか、高山右近はクリスト教への傾倒を深めたいらしい。

その後さまさまな経緯があつたのだが、かつて秀吉が施行したバテレン追放令によって、領地や財産をすべて放棄し、やがて1614年(慶長19年)長崎から追放されて、マニラに移住することになる。マニラでは、イエズス会のおかげもあって、スペイン人のフイリピン総督らから大歓迎を受けたが、船旅の疲れや慣れない気候のため

に間もなく病を得て、到着の翌年2月4日に62歳で没した。マニラに到着したのは前年の12月であつたので、ほんの短い期間の暮らしであつた。高山右近がクリシタンになつたのは、父友照の影響であつたが、父友照と右近は共に、領内の古い神社仏閣の建物を破壊し、神官や僧侶に迫害を加えたという。これによって、高槻周辺は、

畿内にもかかわらず、神社仏閣が少なく、古い仏像の数も少ないと文献にある。このことについては、私はまったく知らなかつた。現実にはどうなのだろうか？ 高槻ではお寺や神社の数は少ないのだろうか？ クリスト教徒側の説によると、右近は決して領民にクリシタンになることを強制したわけではなく、領民が右近の人となりに傾倒して自らクリシタンになつていったとのこと。神社や寺は、それによって収入減となり、必然的に廃止に追い込まれたという話になつている。どちらが本当なのか、知るところではない。

しかし、いずれにせよ、日本にもクリスト教が広く普及する機会は、歴史上に何度かあつたようだ。右近の時代もその一つの時代と言えるだろう。けれども、結果として、現代の日本には、クリスト教徒が多いとは思えない。きつと少数派だろう。ただ、それならば日本人は、仏教に帰依しているの

だろうか？ 自分自身、神道の信者だという人が多いのだろうか？ それもまた事実ではない。このような日本人について、国内外の学者や評論家の中には、日本人は、無宗教だと言う人がいる。クリスト教の中心地、ヨーロッパでは、クリスト教を中心にさまざまな文化があり、思想が構築され、広くは一つの地域としてヨーロッパという概念が有ると言う。民主主義や福祉の精神などもクリスト教にルーツがあるという面もあるらしい。良い悪いは別にして、これは人々の精神の拠り所となつていようように思える。混沌とした現代、日本人の精神の拠り所はいったい何なのだろうか？ 心もとない気もする。

俳句

薫女

- 梅雨曇り瀬戸のどくだみうす白く
- 厨よりああ焼茄子かと目をとじる
- 梅雨じめりドクダミ束ねて部屋のすみ
- 梅雨空にためらいつつも布団干す
- 雨梅雨を含んで落つる紗羅の花



てるてる坊主

季節の移り変わりを、あじさいの花、つつじなどの花達がきそって教えてくれている。

田植えの終わった田圃や準備中の田圃などいろいろあつて、一心に下を向いて頑張っている小父さん「ご苦労さん。がんばってね」と思わず声をかけてしまう自分にハッと我に返る。

雨に洗われた葉っぱは、みずみずしく輝いて私の側にすりよってくる感じがする。しとしと降る雨は、これから迎える夏本番にとって欠かせない大切なものだが、それでも何日も降りつづくと「嫌な雨ね」という言葉に変わってしまう。

「てるてる坊主、てる坊主、あした天気にしておくれ」。子どもの頃は、余った布を母にもらい絵の具で目や口や鼻を描いて、笑っているような顔を書いて作ったもの。

マンションなんかで時々、運動会とか遠足でもあるのか、窓際に下がっているてるてる坊主を見ることがある。

忘れられたように真っ黒になって哀れな姿のまま心なしか困ったようなのを見かけた。お天気が続くこと、てるてる坊主のことなんか忘れてし

まって遊びに夢中なのか、勉強なのか。お礼を言つて片付けてくれればと思うのだが……。通るたびに気になつて目につく。

山椒

葉山椒さんしよが緑にもえて元気に伸びている。亡母の山椒は、まず実を一時間半ゆでて、三日間水にさらしてあく抜きをする。たつぷりの醤油で五日間煮る。焦がさぬように、コンロにたどんを入れて、とろ火で休まず煮るのが柔らかくするコツらしい。私はマネ出来ない。

タドンなし、コンロなし。あるのはガス。いつも固く、ピリツとからいのなら承知だけど。いつまでも口の中がヒリヒリ。

人生楽しく
人は何のために生まれたのか
人は人をよるこぼすために生まれた
何故なら この世は淋しくてつらい
人生はとつても早くすぎてゆく
今日の紅顔 明日は白骨
それならば、なるべく楽しく生きたい
人の最大の喜びは人を喜ばせること
なぐさめ会つて生きてゆく
これは人生の無駄づかい
鳩山さん思いやりの深い人
でも何かが玉にキズとして惜しい人
そうならばいいなと祈つていただけ
追いやられて仕方がない
首ばかりをすげ替えても回復はむずかしい
大きな目を見開いて人間の力で治す
しかない
この苦しみを

編集後記
鳩山さんのあつけない幕切れにはまいった。なんでそうなったのか詳しくよくわかるように回顧録を書いてもらいたい。

突然辞めてしまったのだから「やっぱりええとこの坊ちゃんも素直すぎて政治世界の駆け引きには不向きだ」と思つてしまう。普天間をめぐつてどんなやりとりがあつたのか。

ゆとり教育を受けたうちの娘達を見てると、とんでもない制度であつたと思えてくる。とにかく常識程度の知識がない。何のために学校へ行つたのか。先生はどう見ていたのか。無責任な政治家と先生も同じように思える。

そして、私も同じだ。不遜にも自分に照らして考えれば、無責任で甘ちゃんな人間が世の中の中堅を担う立場に知らぬ間に就いてしまつていふことに気づき、その影響力に空恐ろしいものを感じるの私だけだろうか。



芥川商店街歳時記

中元大売り出し

7月2日～16日

ガラガラ抽選

1等2万円・2等1万円

等賞金が盛り沢山

☆☆☆

夏物お仕立てセール

7月5・6・7日開催

着物地の絹、紗、麻から
涼しい洋服を仕立てます

着物から服を仕立てます

梵~ぼん~